

(法第 28 条第 1 項関係「前事業年度の事業報告書」)

令和 2 年度事業報告書

令和 2 年 4 月 1 日から令和 3 年 3 月 31 日まで

特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会

はじめに

2020 年 10 月 14 日に当会にとっての支柱であった足利由紀子理事長が逝去し、今後運営の継続について危ぶまれる事態となりました。当会は、21 年の活動によって既に単なる任意団体の域を超え、社会の公器としての役割を担っており、また存続は故・足利理事長の願いでもあることから運営を続けることと致しました。

1 事業実施の実績

① 自然に関する理解を深めるための啓発活動の推進

- ・ 上半期は、前期第 4 四半期から始まった COVID-19（新型コロナウイルス感染症）パンデミックの影響をまともに受けた形で観察会などの行事が軒並み中止となった。①の事業に関係した中止行事は、県立工科短期大学校講義・ビーチクリーン、ベッコウトンボ観察会、春の干潟観察会に加え、例年中津市内の小学校で行われている授業、観察会であった。
- ・ 上半期は、行事の中止が相次いだが、会として 7 月 1 日を「中津干潟の日」として制定した。これに伴うイベントとして、東浜のひがたらぼから大新田海岸までゴミ拾いをしながら歩くプチウォークを開催。同時に小幡記念図書館でポスター・写真展を開いた。コロナ対策の苦肉の策であったが、マスコミに注目され、結果としてこの活動が「日韓国際環境賞」や「地域再生大賞優秀賞」につながることもあった。前者は、プチウォークを取材に来られた毎日新聞の記者の推薦、後者は、同じく取材された大分合同新聞の記者による推薦のおかげであった。
- ・ 今期初めて県の子ども探検団の助成金を申請し受理されたが、屋内行事の「子どもアカデミア」が対象であったため、感染防止の観点から辞退した。従って子どもアカデミアも中止となった。
- ・ 7 月ごろから COVID-19 への対応について、行政関係などからガイドラインが示されるようになり、屋外での行事に関しては開催の見通しがついた。このため、アカテガニ観察会、山国川おサカナ観察会、秋の干潟観察会、ズグロカモメと冬鳥観察会などは例年通り開催できた。3 月には、3 年ぶりとなる海苔すき体験も開催することができた。開催できた行事については参加者数もおおむね例年通りとなった。
- ・ 今回で 4 回目となる「中津干潟アカデミア・研究発表会」は屋内行事であるため、観

客を入れての開催はできなかった。代わりに YouTube を利用したネット中継を試みたが画像、音声ともに課題を残す結果となった。内容としては、パネルディスカッション形式で、それぞれの専門の立場から人間と海岸の関係について話した。大学生も研究発表を行ったが、昨年のような市民と対話をしながらのポスターセッションと異なり若干盛り上がり欠けるようにも感じられた。

- ・ 例年テレビ・ラジオ・新聞などへの取材協力を行っているが、今期も主なもので 9 回（NOASFM、朝日新聞、大分合同新聞、毎日新聞等）程の取材を受け、広報につながる成果を残した。NOASFM の地球温暖化問題についての取材依頼は新しい試みであった。

② 調査研究活動

- ・ 前期に続き、中津市より干潟及び野依新池の調査委託があった。干潟の調査では、アライグマ定点撮影調査を行い秋口によく見られることが分かってきた。海苔漁場の塩分濃度調査も継続し、それぞれ対策につなげたい。
- ・ カブトガニ関連の調査は、例年同様に産卵、幼生の個体数、混獲された成体などについて調べた。調査では、大きな変化は認められなかった。
- ・ シギ・チドリの調査は、大阪南港ウェットランドグループをはじめ、協力者のおかげで、相対的にも中津干潟の重要性がますます高まってきたことが示された。来期にこれまでのレポートを冊子にまとめる予定にしている。
- ・ 3 年目となる日本文理大学と干潟学習が児童の情操に与える効果について共同研究を続けているがコロナウイルス問題などもあり今期はまとめることができなかった。今後さらにデータの収集を重ね科学的な根拠を固めていきたい。
- ・ 野依新池の調査では、トンボ類を中心に植物、水生生物などについて行った。水深ロガーも設置したことから、発生するととの相関についても今後調べていきたい。
- ・ 法政大学のシャミック氏が行っている干潟に暮らす人と自然の関係について研究が、来年度論文にまとめられることとなった。

③ 海岸清掃ほか環境美化や廃棄物問題に関する啓発活動

- ・ 海岸清掃、松林景観再生活動についても、新型コロナウイルスの影響から 5 月は中止となった。9 月と 12 月についてはガイドラインなども提示され何とか開催することができたが、参加者数は少なめであった。3 月の三百間ビーチクリーンは、2 年越しということもあり開催したかったが雨天により直前に中止することとなった。
- ・ 例年、清掃と松林に取り組んでいる県立工科短大は、コロナの影響で中止となった。下半期には、小楠小学校がビーチクリーンと松林整備を行った。

④ ブルーツーリズムなどの地域振興を推進する活動

- ・ 3 月に 2017 年以來となる海苔すき体験を実施した。毎回好評をいただいております今後も継続して続けられるよう努力したい。
- ・ アカニシ染めのワークショップについては 5 月に京都からのツアーが来訪する予定であったが、コロナの影響により中止となった。

⑤ 自然環境に関する情報の収集・蓄積・発信

- ・ ガタガタ通信は予定通り年 4 回発行した。これまで故・足利理事長が編集を一手にしていたことから、手書きのイラストと相まって暖か味のあるもので好評であったが、同様のイラストを書けるスタッフが不在であることから、一般の広報のスタイルで編集しているが、できればイラストレーターを確保したい。
- ・ HP のリニューアルの効果が確実に出ている。アクセス数は前年度 21,900 件だったが、今期は 50,000 件を越えた。マスコミからの問い合わせも HP からという事例も出てきた。HP のシステムパッケージの問題で一部不具合が生じている。今後も地道に情報提供を行うと同時に、内容の再検討も行いながらステップアップを図りたい。

⑥ 民間および公共団体の環境に関する事業に対する支援・提言など

- ・ 舞手川河口で実施している養浜の試みが 6 年になるがカブトガニの産卵場所の確保と海岸の保全、河口閉塞の防止という面で効果を上げている。県土木としては、この事業を継続するためには県民への理解が必要とのことであった。会としては、全国に先駆けて行われたセットバック護岸の成立や維持、調整の過程を目に見える形にしていくなが必要があると思う。土木系高校の教科書に掲載されるという話もあり大切にしていきたい。
- ・ 野依新池については予定から 2 年ほど遅れて「おおいたの重要な自然共生地域」にしていされた。遅れた原因は一昨年、池南部の土手が大規模に伐採されたことが影響したと考えられるが、無事指定されることとなった。今後は、さらに保全に結びつく「県の天然記念物」の指定を目指して活動したいと考える。

⑦ 持続可能な社会を追究するためのその他の活動

- ・ ここ数年組織基盤強化及び持続的な経営の確立が急務であるとしていたが、足利理事長の逝去により、実際に多くの問題が露呈している。ただ、多くのスタッフの献身的な協力により何とか例年通りの事業展開が行われている。今後も管理業務及び事業実施業務の分散化、組織の高齢化、関係者のスキル不足、若手の担い手不足など課題を一つ一つ解決していきたい。
- ・ 上記の問題に対応して、事業マニュアルの作成を続けている。主な事業及び管理業務を皮切りに、業務内容のパッケージ化を目指したい。

- ・ 当初予算では 170 万円余りの単年度赤字を予定していたが、「日韓国際環境賞」の受賞に伴う賞金、理事長逝去に伴う寄付金の増額などにより同額の繰越金を残せる状況となった。これは、あくまで特別の事態であり、今後の堅実な経営を心がけたい。
- ・ 経営ガバナンスは、従業員を雇いながら永続的に運営していく上で必須のものであり、理事、正会員がその意義を深く理解しておく必要がある。同時に、資金調達、文書管理、監査体制の確立などについても考慮が必要である。
- ・ 「ひがたらぼ」が設置されて 5 年が過ぎたが、各所に老朽化が目立つようになってきた。しっかりとした建造物に更新するために、土地の確保、資金調達など課題は多いが、子どもたちの学習支援や社会教育、研究の拠点を維持発展していくため一丸となって取り組んでいきたい。

⑧その他

- ・ 今期は、資金やガバナンスなどの観点から厳しい経営が想定されていた。理事長の逝去という事態を迎え、理事、正会員それぞれに思い、考えるところが多かったと思われるが、個々人それぞれにできることを精一杯お手伝いいただいた事で何とか年度末を迎えることができた。経営的には、潤沢な資金が集まったことで 1～2 年は雇用を維持したまま経営が成り立つ状況となった。
- ・ 近年表彰をいただく機会が多くなっているが、今季は「日韓国際環境賞」「大分合同新聞文化賞」「地域再生大賞優秀賞」などの受賞が決まり、「日本水大賞審査部会特別賞」の内定もいただいている。これも、会員をはじめ多くのボランティアなど会を支えて下さっている方々の賜と喜びを分かち合いたいと思う。
- ・ 来期には「地球環境基金」の助成金の運用を予定しているが、行政への積極的な働きかけや市民全体の意識の醸成、情報の発信など、本来の目的である「環境保全」についても今後どのような展開を行うかこれまで以上に真剣に考える必要がある。

(法第28条第1項関係「前事業年度の事業報告書」)

令和2年度事業報告書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

特定非営利活動法人 水辺に遊ぶ会

2 事業の実施に関する事項

特定非営利活動に係わる事業

定款の事業名						
事業内容	実施月日	実施場所	従事者の 人数	受益対象 者の範囲	受益対象 者の人数	支出額 (円)
① 自然に関する理解を深めるための啓発活動の推進						
自然観察会	ベッコウトンボ観察会	中止	野依地区		市民他	
	春の干潟観察会	中止	大新田		市民他	
	アカテガニ観察会	8/1	山国川	10名	市民他	46名
	山国川おサカナ観察会	8/2	大新田	11名	市民他	31名
	秋の干潟観察会	10/17	大新田	11名	市民他	142名
	スグモと冬鳥観察会	12/6	東浜	12名	市民他	22名
	海苔すき体験	3/14	角木	9	市民他	32名
その他行事	海の絵コンテスト	夏休み	中津市内	4名	児童	1,344名
	ひがたかふえ	中止	ひがたらぼ		市民他	
保育園での環境学習指導		1回	中津市	4名	園児	20名
小学校での環境学習指導		21回	中津市・外	28名	児童	1,322名
中学校での環境学習指導		1回	中津市外	1名	学生	30名
短大・大学の環境学習講師		中止	中津市・外		学生	
社会教育の場などでの講師		2回	中津市・外	2名	児童・市民他	15名
企業・その他団体他での講師		5回	中津市・外	18名	児童・市民他	86名
中津干潟NETアカデミア		12/20	小楠コミュニティ	40名	児童・市民他	不特定
マスコミ対応(主なもの)		9回	中津市	9名	市民他	不特定
2,793,321						
② 調査研究活動						
生物調査(カブトガニ)		19回	中津干潟	140名		
生物調査(シギチドリ類他)		20回	中津干潟	36名	学生・市民他	88名
生物調査(ベッコウトンボ・生息地)		22回	野依地区他	20名	学生・市民他	3名
その他(アライグマ・漁場塩分)		25回	中津干潟	27名		
他機関との協働(水産大・文理大・野鳥の会 法政大学)		12回	中津干潟他	16名	不特定	22名
1,129,722						
③ 海岸清掃ほか環境美化や廃棄物問題に関する啓発活動						
ビーチクリーン (漂着物調査)	大新田海岸	5/31中止	大新田		市民他	
		9/13・12/6	大新田	23名	市民他	274名
	三百間海岸	3/21中止	三百間		市民他	

	漂着物調査	1回	大新田	2名			211,991
	学生への指導	1回	大新田	3名	学生	77名	
児童向海ごみ学習用冊子編集		1月	大分県内	1名	児童・県民他	不特定	
松林景観再生	一般参加作業	5/31中止	大新田		市民他		
	一般参加作業	9/13・12/6	大新田	2名	市民他	70名	
	専門作業	19回	大新田	12名	学生・市民他	4名	
	学生への指導	1回	大新田	3名	児童・学生他	77名	
④ ブルートーリズムなどの地域振興を推進する活動							
							0
⑤ 自然環境に関する情報の収集・蓄積・発信							
会報誌発行	4回	国内	4名	国内	1500名		368,751
ホームページ維持管理	通年	国内	1名	不特定	50,473アクセス		
生物データベース管理	通年	国内	2名	不特定			
環境イベント出展	中止	今津		不特定			
⑥ 民間および公共団体の環境に関する事業に対する支援・提言など							
野依新池ボウリング調査助言	6/26・8/18	らぼ・新池	3名	行政・団体	6名		4,232
アンケート協力(主なもの)	4回	ひがたらぼ	1名	行政・団体			
河川協力団体	通年	ひがたらぼ	2名	行政・市民			
野依新池ベッコウトンボ保全作業	11/28	野依地区	9名	市民他	27名		
団体ヒアリング受入	4回	ひがたらぼ	3名	団体	8名		
五十石川連携ほか	通年	中津市内	2名	市民他			
海岸事業に関する検討	通年	中津市内	4名	行政・市民			
ベッコウトンボ保全に関する検討	通年	中津市内	2名	行政・市民			
⑦ 持続可能な社会を追究するためのその他の活動							
「ひがたらぼ」運営	通年	ひがたらぼ	5名	不特定			966,122
NPO基盤整備	通年	ひがたらぼ	5名	不特定			
商品(カフトガニサブレ・海苔他)販売	通年	中津市・外	3名	不特定			
ガタガタ広場水道設備設置	通年	大新田	1名	不特定			